

幼児教育カリキュラムの効果の追跡比較 (III)

—— ワイカート・レポートの紹介 (2) : 結果 ——

○ 北川 歳昭・加藤 泰彦・平松 芳樹
(中国 短期 大学)

本稿では、ワイカート・レポート (Schweinhart et al., 1986)の中心部分である「結果」を紹介し、若干の批判的論評を加える。ワイカートレポートの「結果」は、3つのプリスクール・カリキュラムが、知能、学力および社会人としての知識や技能などの知的発達に及ぼした効果と、非行、学校や家庭における行動や態度などの社会的発達の側面に及ぼした効果とに大別されている。

1. 知能および学力への効果

知能は知能検査 (スタンフォード・ビネーおよびWISC) を用い、学力の測定にはカリフォルニア学力検査 (CAT) を用いた。

①知能指数の追跡〈幼児教育の全般的効果〉 (図1上)

プリスクール・カリキュラムを受けた実験群と受けなかった統制群の10歳までのIQ値を追跡した (表1)。実験群のIQは、プログラム開始1年目に27ポイント上昇し、78から105になった。2年目にはやや下降しているものの、全国の平均水準に近い98を維持している。10歳つまりプログラムが終了して6年後の実験群のIQは、3歳時よりも16ポイント高く、また、統制群よりも9ポイント高い。実験群のIQの上昇は、期間を通じていくぶん下降はしているが、統制群を常に凌いでおり、10歳の時点でもなお統計的に有意な優勢を保っている。

②知能指数の追跡〈カリキュラム間の比較〉 (図1下)

3つの実験群を比較すると (表1)、ディスター群が最も高く、ナースリースクール群が最も低い傾向にあるが、それらの間の差は小さい。3群間に有意な差が認められたのは、プログラム2年目の5歳の時だけであった。幼稚園以降、統制群のIQは85から90の間に安定したのに対し、カリキュラムを受けた実験群はいずれも90から100の間に安定した。4歳から10歳までの平均IQを見ても、ディスター群が97、ハイスコープ群が96、ナースリースクール群が94で、3群間に有意な差がなかった。

③学力、社会人としての知的能力〈カリキュラム間比較〉

学力 (CAT) は7歳時と8歳時に測定されているが、い

ずれも3群間に有意な差がなく、また一貫した傾向も見られない (表2a)。これは、4、5歳時に見られたディスター群の知的優勢が小学校における学力にまで波及しなかったことを意味する。

15歳時に測定された社会人としての知的能力 (APL) においても (表2a)、総合得点では3群間に有意な差がない。しかし、下位尺度においては、11尺度のうち9尺度で、ディスター群が他の2群より低い得点であり、特に職業上の知識と筆記技能の尺度で、その差は有意であった。

2. 社会的適応への効果

15歳時の自己報告によって非行経験、家庭や学校における行動や態度、精神的健康度などが測定された。

①非行を犯した回数〈カリキュラム間の比較〉

ディスター群は、他の2群に比べて非行を犯した回数が2倍多く、3群間の差は有意である (表2b)。下位尺度のいずれにおいても、ディスター群は他の2群よりも非行得点 (回数) が大きく、器物破損、地位義務違反においては3群間の差が有意であり、薬物乱用の尺度でも有意水準に近い。18項目のうち16項目においてディスター群が他の2群よりも非行得点が高い。3群のうち、ハイスコープ群が最も非行を犯した回数が少ない。しかし、警察に実際に補導されたり逮捕されたりした回数については、3群間に差がなかった。

表1 各群のIQの推移 (***) p<.001 ** p<.01 + p<.10)

群	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	10歳
	プリスクール以前	プリスクール1年目	プリスクール2年目	キンダーガルテン	小学校1年	小学校2年	小学校4年
実験群	78	105***	98***	96***	95***	91+	94**
統制群	79	83	84	87	87	87	85
ディスター群	79	107	104**	99	97	91	97
ハイスコープ群	77	106	97	97	92	92	92
ナースリースクール群	79	102	92	93	95	90	91

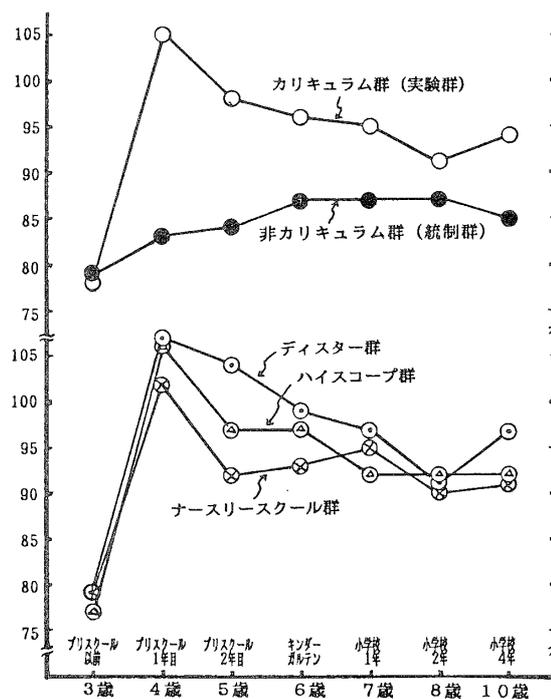


図1 全期間にわたる各群のIQの推移

②社会的行動と態度〈カリキュラム間の比較〉

非行回数と同様に、家庭や学校などにおける社会的行動の領域においても、ディスター群に問題点が多いことが示唆されている(表3)。特に3群間に有意な差があったのは、

「家族は自分のことを考えてくれているかどうか」、「課外スポーツ活動に参加しているかどうか」、「学校で委員や係に任命された経験があるかどうか」の項目であり、読書経験の有無についても有意水準に近い差があった。その他、有意水準には届かなかったが、今後の進学希望の低さ、個人的な悩みの多さ、他者に助けを求めた経験の少なさ、能力の自己評価の低さなどの項目で、ディスター群が最も際立っており、

表2 知的能力及び非行経験：カリキュラム群間の比較

変数	ディスター群	ハイスコープ	ナースリースクール	p
2 a. 学力及び社会人としての知的能力				
7歳時の学力(CAT)	100	102	106	—
8歳時の学力(CAT)	160	167	154	—
15歳時の知的能力(APL)	15.1	17.7	18.4	—
2 b. 15歳に記述した非行経験				
非行得点(18項目)	12.83	5.44	6.94	.04
暴力行為(喧嘩、傷害等)	2.28	0.88	1.17	—
器物破損(放火、破壊等)	1.72	.28	.39	.04
窃盗(盗、車窃盗等)	3.06	1.72	2.22	—
薬物乱用(マリファナ等)	3.17	1.06	1.89	.06
地位義務違反(親との口論、家出等)	3.04	1.56	1.22	.04

表3 15歳の時点で報告された社会的行動および態度

変数	ディスター群	ハイスコープ	ナースリースクール	p	
家族関係	家族と仲が良くなかった	22%	0%	17%	—
	家族は自分のことをあまり思っていない	33%	0%	6%	.03
	家計の収入に貢献している	14%	33%	23%	—
課外活動	スポーツに参加しない	56%	6%	28%	.02
	最近、本を読んだ	31%	69%	59%	.09
	ボランティアの仕事をしたことがある	22%	28%	28%	—
学業態度	学校での委員や係に任命されたことがある	0%	12%	33%	.02
	高等学校以上進学したい	50%	77%	64%	—
	学校への態度(19項目)	44.3	49.3	45.9	—
	学習への態度(9項目)	21.3	21.5	20.8	—
精神的健康	教師への態度(10項目)	23.1	27.8	25.2	—
	悩みは人よりも多い	17%	11%	11%	—
大切にしたい分野	個人問題で援助を求めたことがある	11%	41%	22%	—
	学校	44%	39%	50%	—
	スポーツ	17%	39%	17%	—
	家庭	11%	17%	6%	—
	友人	6%	0%	28%	—
	その他	28%	6%	0%	—
その分野での自分の能力は他の人より低いと思う	29%	6%	18%	—	

ハイスコープ群とは対照的であった。

ワйкаート・レポートでは、ディスター群が非行、特に地位義務違反を頻繁に行なったことについて、「尊敬心の欠如と権威への怒り」の表現であろうと推測している。また、ディスター群の家族関係が薄く、個人的問題に援助を求めようとしないこと、スポーツへの参加度が低く、学校で委員や係に任命されたことがない、という点について、「いろいろなチャンネルを通して兄弟や教師から社会的受容を求めたり受け取ることをしない」ためであろう、と解釈している。

3. 「結果」についての考察

ワйкаート・レポートの「結果」を概括すると次のようになる。質の良いカリキュラムの実施は幼児の知能を急激に向上させ、その知的側面への効果は、カリキュラム終了後、減衰しながらも数年間は持続する。カリキュラム間の比較では、ディスター群がやや優勢であるが、大きな差はない。カリキュラム間の差は、むしろ、青年期の社会的適応の側面で顕著に現れる。つまり、3つのカリキュラム群の中でディスター群は最も社会的不適応の傾向がある。

知的側面への効果はカリキュラム終了後に減衰(消失)するのに対し、社会的適応の側面への効果は10年後まで維持されるのは、なぜであろうか。この疑問に対して、このレポートが十分に説得力のあるデータを提供しているとはいえない。幼児期・児童期の社会的適応の状態、青年期の知能水準、そして統制群の児童期・青年期の知能および社会適応、などに関するデータが欠けているのは惜しいことである。

カリキュラム効果の知的側面は、主にIQ(学力)に基づいて比較検討されているが、各モデルが教育目標としている知的発達の意味がIQや学力という一元的な尺度によって捕らえられるのであろうか。知能多因子論によるならば、各群のカリキュラムはそれぞれ別の知能因子に影響した、とも考えられる。幼児・児童期の知的発達と青年期の社会的・道徳的発達の関係を合理的に説明するためにも、知能の因子別発達の分析が必要であろう。

幼児期2年間の教育経験の差が10年後にも有効な差をもたらすには、カリキュラムの幼児自身への直接的な影響もさることながら、子どもにとって身近で一貫した教育環境としての親の影響は大きいであろう。ワйкаートらのプログラムでは、カリキュラムの構成要素として、教室での保育の他に、教育的家庭訪問が実施された。カリキュラムの一環としての「両親教育」による親の変化、子どもへの間接的影響をとらえるべきではなかったか。

ワйкаートらはピアジェ派カリキュラムの推進者であるためか、ディスター群のIQ上昇をやや過小評価したきらいがあるのはやむをえないが、一方の立場にありながら対立的なカリキュラムをも実施し、その効果を長期間にわたって追跡し比較した度量の広さ、スケールの大きさは大いに称賛に値するといえよう。保育効果について、自己満足的な、近視眼的な評価に終ってしまいがちな我が国の幼児教育の現状に、このレポートの与えるインパクトと示唆は大きいと思われる。